



大宮八幡社正面

人の木曾氏（木曾義昌二女）が、世子を佐伯で生んで勘八郎と称した。

初め夫人が妊むと高政は大宮八幡祠に祈って男子を得た。因って稚松を手栽して祝って「子孫の繁昌、なお松の茂る如くならん哉」と言われた。後二〇〇年を経てなお残って、老幹相抱き、枝葉鬱蒼として重陰祠宇を掩う」

大宮八幡の改築に

番匠の里を想う

佐藤

巧

（会員・建築士・池船町）

一、大宮八幡（佐伯市戸穴）

佐伯藩十二社の筆頭^{注1}に挙げられている大宮八幡は、

『慶長八年（一六〇三）藩祖高政夫

と『鶴藩畧史』^{注2}に記してある。

同書は又更に注して

「大宮八幡祠は、応神天皇、神功皇后、仁徳天皇を合祠。文永年中（一二六四〜七三）佐伯惟久^{注3}の掲げる社殿上棟文が今尚存す。その文は鎖滅^消して唯大同二年大宮祠の七字畧々約弁すべし。是により之を考えれば則大同二年（八〇二）の創建疑いなきに似たり。

惟宗、惟賢、惟治に施及し、祠宇の修造相続き、神威厳然たり。

降りて慶長に至りて高政封に入りて以来累世尊崇して佐伯氏に譲らず」（『鶴藩畧史』）

畧史に述べる如く古くから由緒深い宮で、郷の人達の信仰も厚く、特に漁業にたずさわって来た人達にとって漁船を乗り出して大漁祈願のジョーヤラ(リョウアレヤ)は近郷近在の人を集めて五丁の市が立つ。

神祭りの別名もあり特色のあるお祭り行事と併せて祭られる神殿がその信仰の象徴として、神域も森厳さが保たれ、社殿もそれにふさわしく立派な造りがなされていた。(写真一) 向造の構造で、その破風下の奥の妻構造も二重虹梁(妻虹梁)の形も斗拱も仕事が良い。

写真4、5に見る如く、手挟、木鼻、或は裏股の彫刻類は本殿の脇障子はめ板の彫刻と共に繊細にして雄渾、特に拝殿の彫技は優れていると感じた。



2 拝殿棟札 (表)

たくさん天井絵馬は雨もりの為大変いたんでいたがまだ良いものが残っている。画家の数名はまだ詳細な調査は未整理であるが優作である。

一寸気がつきにくい斗拱などの手法もすぐれているからこそ外容のしっかりした神社としての品格を保っていた。

こうした貴重な文化財がコンクリートに変わるといふことを聞きつけて駆けつけたときにはもう決定的なものになってどうにもならなくなっていた。教育委員会の加藤課長に呼びかけられ、文化財調査委員の清田氏も同行されていた事ではあるが、異口同音にこの関係者達の文化財の質に対する無理解に不満の言葉をなげかけた。



3 拝殿棟札 (裏)

神社建築は堅固であれば良いという事ではない。特に本殿を残し、周辺の森厳さを保たれている樹間の台地に鎮まります社は伝統的な神社造りが望ましい。勿論木造が良い、木造のもつ弾力性、暖かさ、柔軟性、復原力など木材のもつ特性と、番匠ばんじょうのもつ修練の技と誇りの相乗積に依って生み出される作物きくぶつで、コンクリートによる構造体とは比較すべくもない。ただし木材そのものが生命のある素材として生かせる番匠でなくては話
は別である。



4. 手 挟

自然木の生命は伐採されたら死滅するものでなく、堂塔の中に生かされるように使われるなら、千年の齢を経た大樹は堂塔に用いられて千年近い新たな生命を以てよみがえる
と法隆寺大工は実例で証言している。

注⁵

又樹の進化過程が、そてつ↓いちよう↓ひのき・すぎ↓なら・ぶな↓庭木の道筋を経ていることから、原始的のものも、あまり高級になり過ぎたものも、ともに実際の役に立っていない。進化の初期的な針葉樹や、それに近い一部の広葉樹の方が実用に適している。

と経験注⁶を科学的裏づけで証明している。樹を生長時の状況に合わせて、日表・日裏、曲り、産地、土質まで考えて選材し、一本の樹の中でも夫々



5. 向 拝 の 象 鼻

の成長のくせと使い場所、方向に合わせた配慮の必要条
件を充す事は、表面加工技術の修練以外に学びとらねば
ならない要件であるから、優れた番匠ばんじょうならでは良い日本
建築を保存していく事はむづかしい。

この拝殿のコンクリート化に当ってその解体がブルド
ーザーによる破壊作業で、解体費用が見積られてなく、
単なる材料の残骸化する計画をきき、前記の要部を残す
ため、私財を投じて解体し、保存の方法を考える交渉を
して工期を延ばす解をとりつけた。

古建築の解体はいろいろな点で研究になった。棟札（
写真2）や懸魚けいぎょ（工人はけんぎよとも）の裏面、向拝斗むかいたて
枱うわの先端に書かれた墨書によると、この拝殿は天保十四
年七月廿二日着工で翌十五年四月七日に完成した事を示
している。

これに関わった職人は、棟梁―当村広末嘉八郎貞元、
脇司―岩佐弥兵衛・広末順蔵・広末岩吉、大工―吉野宮
左衛門・上野村直蔵・狩生村吉五郎・海崎村佐吉・色利
浦勘蔵・戸穴村幾蔵・同所勝蔵・木挽世話方―戸穴源八
・同所代蔵・同所孫平・百枝勘蔵・同所繁蔵の氏名が書
かれている。

大宮八幡解体に当り、更に思いを新たに一般住家
と比較して古代日本建築の伝統の保たれている神社建築
の保存と再生について振り返って見たい。

神社の生命は森厳さにある。人の力の及ばない世界に
神仏の加護を願ひ、心を静めて大いなる力を信じつつ転
換、邁進の道を行じたいのである。

神社は永い歴史の中に郷の人達の願ひを現わした形と
も云える。昔から番匠たちがこの庶民の願ひにこたえて
懸命なはたらきをして来た証拠を残してくれている。

これが日本の社寺建築であり、工人は堂宮大工として
大工達の上位にその誇りを保って来た。これを番匠（番
上）と呼び、堂宮大工として尊敬されて来た。

大宮八幡社の解体された目星しいものを清掃・整理し、
社寺古建築の研究資料として目下整理中であるが、一度
皆さんの協力を得て、関係図面写真、古建築、規矩術等
の古書の蒐集等も含めて展示の計画をすすめている。

将来特色のある資料館建設の夢を抱いて研究体勢をつ
くりあげると共に、番匠の里にふさわしい我々の技術の
向上を競い度い。どうぞ佐伯の皆様のご鞭撻をいただき
たい。

二、番匠ばんじょうの里じくろ

地方の時代と言われはじめて久しい歳月が過ぎたが、漸く近年「町づくり」の考え方も変って来た。それは住民運動である「町並み保存」が全国的に波及して行ったことにより、我々をとりまく自然・歴史・文化・町並み・人情等あらゆる環境の見直しが必要とされ、従来の画一的な町づくり行政の見直しがせまられてきた。

これらの諸情勢により、各省庁が地域の特性を重視した町づくりを前面に掲げはじめたから、個性のある町づくりに拍車がかかってくると思われる。

建設省が昭和五十八年度に創設した「地域住宅計画」によれば「自然環境・伝統・文化等地域が持つ特性を重視し、これを生かしながら将来に資産として継承しうる質の高い居住空間の整備による良好な地域社会の形成を図り、地域の自主性や多様性を尊重することにより、地域の発意と創意による住まいづくりを推進する」とその趣意を述べている。

その地域の自然景観や町並み景観を生かし、地域の建築材料や大工職人を生かすことによって、個性のある将

来的な住環境を創り出そうとするもので、物的水準を越えた目標として「いえなみ」「まちのたたずまい」などを掲げている。

このような状況下で、我々建築に携わる者は、安穏と中央志向の建築雑誌をめくってばかりはいられない。佐伯の歴史風土、その中に育まれて来た建築文化・職人技術とは一体何であったのか、それらを今後の町づくりの中にどのように活用し継承していけるのかを、自らの努力で捜し出さなくてはならない。

佐伯には古くから番匠ばんじょうの地名を残しているように、中世の昔から誉れ高い職人達の育って来た土地柄であり、その血脈は現在に及んでいる。ここに一大「職人の里」を復活させ、他に類例のない町を築くこともあながち夢ではないと思う。

すでに佐伯では山際通りの保存地区に、佐伯の伝統的建築デザインや、職人技術が必要に迫られている。またこうした町づくりは、城下町に限らず、佐伯市近郊の農村村まで考えられてほしいものである。

注「佐伯志」佐藤蔵太郎著 一二六頁

注 2 「鶴藩畧史」増村隆也訳 平山(右)小文治編纂さん

「佐伯市史」八六四頁

注 3 惟久(大神姓佐伯氏系図による四代)は、豊後

岡田帳佐伯本荘百二十町の地頭佐伯弥四郎政直事五代惟直の父で左衛門尉という。室町時代の入で記事の文永は年代がさかのぼりすぎるように思うので文安年中ではあるまいか。

注 4

向造(むこうづくり)屋根の切妻破風が正面に向うもの。側面に破風をもつ流造ながれづくりに対する語。

棟札(写真2)に二軒三斗向造とある。普通むくり破風に対して使う千鳥破風の語が使われる。

二タ軒は、地極(おも極)と、ひえん極(小軒

極)、三ッ斗は、中央の方斗及びその左右の巻斗まきとからなる斗組(斗栱)

注 5 「法隆寺を支えた木」西岡常一、小原二郎著。

注 6 「同右」日面は立木の樹心から南半分、生き節が

多く、木目は荒く強い。日裏は反対で日蔭部分で、生き節が少なく、木の通りは良いが木に力がない。日表は柱のような構造材に、日裏は見ばえの大事な造作材に。(中暑)

注 7

向・拜とは社寺などで正面に突き出た部分。参詣人の礼拝の所。後・拜ごはいは堂の前後に向拜を設けた場合に、前面の真正なるを前拜といい、後面を後・拜ごはいという。向拜は、ごはい、又はこうはいと呼ばれる。

